

日本大学 三島同窓会夕報

第16号

昭和61年10月30日
静岡県三島市文教町2
日本大学三島同窓会発行

昭和六十一年度幹事会開く

土屋忠得会計担当常任幹事から説明、監査報告は、中島敏男会計監査から、それぞれ報告された。
(詳細は四、五頁参照)

日本大学三島同窓会昭和六十一年度幹事会が、母校日本大学三島学園八号館で、昭和六十一年五月二十三日(金)、午後六時三十分から開催された。

幹事会は短大商経科四十一年度卒業生の小出博常任幹事の司会で進められ、西村美枝子会長の挨拶の後、議長団、書記が選出され、

議長に教養九期の根岸元宏幹事、

副議長に教養十四期の小沢文郎幹

事、書記に短大家政科二十三期卒

業生の井上かほる常任幹事、二十

五期卒業生の田中昭子幹事を選出

し、議事に入り、次の事項が承認さ

れた。

一、昭和六十一年度事業報告について

二、昭和六十一年度決算報告につ

いて

三、監査報告について

四、昭和六十一年度事業計画につ

いて

五、昭和六十一年度予算案につ

いて

六、総会について

七、活動状況報告について

八、その他

なお事業報告・事業計画は、角田義廣事務局長、予算・決算は、



13号館 AVセンター内

幹事会に統いて、恒例の懇親会が短大商経科四十六年度卒業生の久保田博明常任幹事の司会で、同会場にて、和気あいあいの中での盛大に行われた。

三島の良さ

平野榮次

(三島学園事務局長)

同じ学校で同一の師について学生んだ者同志を「同窓」という言葉で表わしていますが、僅か一・二年、長くても四・五年という限られた期間での交友関係が、「同窓生」という形で長い人生の中で永続されてゆくことは不思議にも感じられることです。

この不思議にも感じられる一種の人間関係は、恐らく青春多感な

時期にあって、お互いに利益関係ができるという年齢環境の中で成立したものと考えられます。

社会的にはいろいろな立場にあり、各種の職業についている者同志が、大人のつき合いの中で「お前」と呼び合いつつ、名前を呼び棄てて呼び合うという特異な交

流を行っても、格別奇異に感じられないというのは、その関係が成り人以前の純真な世代に成立したからでしょう。

日本大学三島同窓会はこのようなことが前提となって結成され、今まで発展の一途を辿ってきたものと考えますが、教養課程・短期大学・四年制学部・大学院といった異質の高等教育体系の中で学んだ人たちが、一体となつてこの会を盛り立て、現在の盛況を見るに至らしめたという実績は、他の学部や他の学校には見られないでしよう。

このようにそれぞれ異なる教育課程の中で学び、一年間のみの修学期間しか無かつた者までが、これとなつてこの会を盛り立ててきているという事実は、他の学部

から転じてきた私にとつては、大変な驚きとなつております。これは樹木の多い落ちついた教育環境、富士山や愛鷹山あるいは箱根・伊豆の諸山に囲まれた静かな街、そして人情豊かな土地柄の中で醸成されたものではないでしょうか。今でも文理（三島）で一年間の教育を受け、法・文・経・商の四学部に分散していく学生諸君が移行先の学部では強く結束し、学部を超えて交友を続けており、また移行後も国際関係学部や短期大学部の学生とクラブ活動等を通じ交流を続いているという事実も、三島同窓会の結束の基盤となつてゐるものと思われます。

この三島学園独特の人間関係が、三島同窓会の結束をうながし、これが学園の向上をもたらし、ひいては日本大学の発展に大きく寄与しているものと確信しております。

日本大学三島学園を構成する国際関係学部、大学院国際関係研究科、文理学部（三島）、短期大学部（三島）、三島高等学校は、それぞれ発展のための難問を抱えております。また学園を取りまくわが国の社会状勢や教育事情も大きく転換しようとおります。

日本大学三島学園を構成する国際関係学部、大学院国際関係研究科、文理学部（三島）、短期大学部（三島）、三島高等学校は、それぞれ発展のための難問を抱えております。また学園を取りまくわが国の社会状勢や教育事情も大きく転換しようとおります。

日本大学三島同窓会はこのようないすれども、その在り方は次第には変らず、私が奥田市長と区別がつかなくなることはあり得ません。能力の点でも大きく変つてせん。能力の点でも大きく変つていいでしよう。つまり素材を組立てて、その働きを続けさせる内部の仕組が、問題の第一の要素と生きてゆこうとするかという一つのモラルがあつてはじめて、私の存在が社会に意味を持つわけです。私はどのよう

いが次第に強まりかつ拡大していくのが、社会の近代化の過程ですから、一人よがりの慣例偏重・前例遵守主義で事足れりとする考え方では、組織は衰弱してゆかざるを得ません。先にも触れたように、今日では学生の質も極めて多様化し、学生一人一人の生活を見ても、学園外の部分が占める割合が、質量共に急速に増えてきている現状です。また課外活動をとつて見ても、特定の活動に専念するクラブに対し、多種多様な行事をとり入れ、メンバー間の親睦を主たる目的とするサークルの活動が盛んになり、さらにそれが学園の範囲を超えて、社会が本学園に求めるところも大きく変つてきました。

このような状況の下では、国際化の流れを踏まえ、地域社会と、啓蒙活動・生涯教育などの形で結びつきを強めるとともに、その中で社会に有為の若人を育成するところに、本学園の進むべき方向があるのではないかと想ひます。俗に言う「初心」を大切に形式論でも感傷論でもなく、実質面から皆で問い合わせるべきでありましょう。「三つ子の魂」と言いましょう。

一方、外部の環境が変り、自分自身を造っている素材が変化してゆく時、それに適応しつつ自己の存在を打ち出してゆかなければ、生きものはその生命力を失います。

組織の問題として見ても、社会

三つ子の魂

中村昌介

(三島学園学生担当)

組織は生きものだと言われます。

とすれば、それは環境の変化に適応し、絶えず成長・変化してゆく筈です。本学園で五年余、地域経済論の講義で、地域という一つの組織をこのように把えることで学生諸君に接してきました。

はじめから話が横道にそれで恐縮ですが、生きものの在り方は次

も進んでいます。学園運営のあり方もまた徐々に変つてきているよ

うです。この間、第三の要素とし

てのモラル、学園運営の「理念」

についてはどのような流れを認め

ることができます。この節目にあたり、先人の

払つた御労苦に十分な敬意を払う

ことができるでしようか。

本年は学園開設四十周年にあた

り、その記念行事が催されていま

すが、この節目にあたり、先人の

払つた御労苦に十分な敬意を払う

ことができるでしようか。

伝統を生かしながらも、閉鎖的な学園の形成を廃し、開かれた学園としての新しい理念を確立するため、同窓会メンバーの皆様の積極的な貢献が待たれます。そして学園と社会との橋渡しの役を果していただき、これらの活動の中に「三つ子の魂」を大きく花咲かせてゆこうではありませんか。

家政科懐古

小佐野嘉子

(短期大学部家政科長)

「老人には新しい時代の流れを教え、若者には昔はこうであつたという歴史を認識させることが必要である」……この言葉を耳にした就任当時の私には遠いことと思われましたが、いつしか若者に古きを認識させる立場となり、今更のように月日の立つのは早いものだと痛感しております。

昭和三十四年日本大学七十周年を記念し両国の大講堂に天皇、皇后両陛下をお迎えし盛大な記念式典が行われました。その記念行事の一つとして総合大学を背景に、知性と教養を兼ねそなえる現代女性の育成にと此の三島の地に女子のみの短大栄養科が新設され私も共に就任いたしました。

当時はうす暗い旧軍隊の兵舎あとではありましたが単なる短大栄

養科という小規模の出発ではなく

七十年の歴史と伝統を誇る一大総

合大学の一専門部門として誕生し

日大では初めての女子学生として

大学あげての協力のもとに今後進むべき理想と抱負と欣びを学問を通じて学生と共に経験し、この恵まれた環境のなかで人間形成と学術の習得に重点をおき幅広い科学性のある現代女性を育成したいと

専攻分野の開拓に自分の若さを学生にぶつけ合った数々の思い出は今もつて忘れることは出来ません。

創立期にはトラブルがつきまと

い割り切れない世の中の問題は何時何處で爆發するかも知れません。人間が決める法的解釈の困難さを

栄養科全学生が黒のスーツ姿に白い手袋、胸には桜の花をつけての国立競技場でのさつそうとした行進姿、すみやかに着替ての絆の着物に赤襟と赤い袴で応援席を埋めつくし各学部対抗の応援合戦での茶摘おどりの優勝姿など、当時のオール日本にはユニークな存在であり、三島の環境に溶け込むふさわしい姿であったことなどが懐しく想い出されます。

四年後には家政専攻が誕生し、栄養科が家政科と改め食物栄養専攻の二専攻となりました。あれから二十八年、家政科もますます充実し、堅実な発展を示しております。

一昨年からは一期、二期、三期、五期の卒業生の娘さんが入学し親子二代に亘る学生を迎える教師としてのよろこびを感じております。悲喜交々の二十八年の歳月、短いようでもやはり長かったことになります。

昨年より微力ながらも家政科長の大役を受けつき、今までの経験をもとに女性の立場から諸先生方の御協力を得て、家政科が教育の目標としている現代女性としての豊かな教養を高め、さらに細やかな愛情のもてる、そして時代が要請する誠実な女性の育成にと前進致してまいるよう努力いたします。

私の学んだ頃

同窓会会長

西村美枝子

いたことは、大変残念なことでした。今は遠くの出来事として、あれもこれも懐かしく思はばかりです。當時は文科、理科に分かれ、希望する学部の違う学生が一緒に、運動部と文化部に属して部活動をしておりました。従つて現在多方面に亘って活躍する校友を持たることは、色々な面で有難くまた誇りにも思つております。



日本大学三島学園開設四十周年を迎えるときに、会長に選ばれましたことは、大変光栄であります

と共に、大きな責任を感じております。会員皆様の御協力をお願いする次第でございます。

今年は、男女雇用機会均等法が施行され、女子の働く場所も増え

て、嬉しい時代になりました。私の卒業した頃は戦後の混乱時代で、企業も少なく女子はおろか男子も就職難でした。男女同権の時代になつたとはい、未だ何事も「女」ということだけで特別視されていました。

た頃、昭和二十二年に日本大学三島子科が、初めて女子に門戸を開くといふので入学致しました。

当時の学校は、陸軍野戰重砲聯隊から払下げを受けて間もない施設で、私の背よりも高い雑草が校庭に生い茂り、軍隊の名残りを止める兵隊臭い木造の教室や、講堂は大砲を入れて置いたガランとした大きな倉庫で、東京から見える先生方の集中講義室に当たられていました。

また、在学中の授業料値上げ反対に始まつた学園紛争も、忘れることが出来ません。試験のボイコット、警官の出動等で、期末試験はすべてレポート提出になりました。

その折学校側についた少數の学生はすべてレポート提出になりました。

この良き伝統を受け継ぎ、会員の皆様の声を聞き乍ら、同窓生の結束を固め更にその輪を広げ、来たるべき五十周年に向かつて、母校の發展に少しでもお役に立つよう、精一杯努力致しますので、皆様のご支援とご協力をお願い申し上げます。

もともと女性の立場から諸先生方の御協力を得て、家政科が教育の目標としている現代女性としての豊かな教養を高め、さらに細やかな愛情のもてる、そして時代が要請する誠実な女性の育成にと前進致してまいるよう努力いたします。

西村美枝子

西村美枝子

昭和60年度 事業報告

1. 同窓会長賞授与並びに奨学生の給付

昭和60年度日本大学三島学園在学生から、次の者が推薦された。短大関係は同窓会長賞を贈り、昭和61年3月25日の卒業式当日（日本武道館）、国際・学部教養課程は奨学生を贈り、4月9日の三島学園開講式当日それぞれ授与式が行なわれた。

同窓会長賞	後 昭子(短大・国文)	塩崎 朝子(短大・食栄)	鈴木 文量(短大・商経)
奨 学 金	森田 克彦(国際・関係)	佐上 菊二(国際・文化)	大滝 基義(法・管 行)

1. 学園歌集発行

本年度は、昭和61年4月新入生全員に対し、入学祝いとして渡した。

1. 会報発行

会報15号、昭和60年10月20日発行 8頁 4,000部

1. 総会並びに懇親会

昭和60年11月3日(日)16時から、総会並びに懇親会を日本大学三島学園記念館で開催した。

1. 幹事会

昭和60年9月20日(金)18時30分から、日本大学三島学園8号館2階で開催した。

1. 記念品贈呈

前会長西村満男氏に対し、昭和61年1月8日、三島プラザホテルにおいて、西村現会長から記念品（広辞苑）を贈呈した。

昭和60年度 収支決算書

(昭和60年4月1日～昭和61年3月31日)

(単位：円)

支出の部				収入の部			
項目	予算額	決算額	差異	項目	予算額	決算額	差異
奨学費	550,000	158,550	391,450	会費収入	1,854,000	1,885,000	△ 31,000
学園歌集発行費	200,000	130,000	70,000	雑収入	959,091	1,047,233	△ 88,142
同窓会報発行費	300,000	104,000	196,000	前受金収入	900,000	776,000	124,000
各科同窓会等補助	350,000	107,670	242,330				
総会並びに懇親会費	450,000	374,290	75,710				
会議会合費	270,000	269,400	600				
通信運搬費	100,000	27,200	72,800				
事務費	30,000	18,500	11,500				
雑費	400,000	176,820	223,180				
予備費	200,000	65,530	134,470				
計	2,850,000	1,431,960	1,418,040	計	3,713,091	3,708,233	4,858
基 金 繰 入 額	0	1,500,000	△ 1,500,000	基 金 繰 出 額	0	0	0
次 年 度 繰 越 金	900,000	813,182	86,818	前 年 度 繰 越 金	36,909	36,909	0
前 受 金	900,000	776,000	124,000		.		
繰 越 金	0	37,182	△ 37,182				
合 計	3,750,000	3,745,142	4,858	合 計	3,750,000	3,745,142	4,858

貸借対照表

(昭和61年3月31日現在)

(単位：円)

借 方		貸 方	
項 目	金 額	項 目	金 額
普通預金	893,182	基 金	19,580,000
定期預金	19,500,000	前 年 度 繰 越 額	18,080,000
		本 年 度 繰 入 額	1,500,000
		次 年 度 繰 越 金	813,182
		前 受 金	776,000
		繰 越 金	37,182
合 計	20,393,182	合 計	20,393,182

昭和60年度収支について関係帳簿並びに証憑書類を精査いたしましたが、記帳その他正確であることを認めます。

昭和61年5月23日

会計監査 中島敏男㊞

同 持田光雄㊞

昭和61年度 事業計画

1. 同窓会長賞授与並びに奨学金の給付

日本大学三島学園を昭和62年3月卒業予定（国際・短大）、移行予定（学部教養課程）の者を対象とする。

短期大学部……………各科1名宛同窓会長賞

教養課程（法・経・商・文理）…………若干名宛奨学金（2名程度）

国際関係学部……………各科・学年1名宛（計4名）奨学金

1. 学園歌集発行

稿を改め、2,500部を発行し、三島学園新入生全員に入学祝として渡す。

1. 学園歌の募集（別紙）

1. 会報発行

会報16号（昭和61年10月）発行 8頁 4,000部

会報17号（昭和62年2月）発行 8頁 4,000部

1. 名簿発行

(1) コンピューター利用を含めて、必要項目の検討。

(2) 各科の名簿編集の推進。

1. 三島学園開設40周年記念に係わる事業

1. 三島学園体育奨励会との関係

1. 総会並びに懇親会

昭和61年11月3日(月)16時から日本大学三島学園記念館で開催する。

1. 幹事会

昭和61年5月23日(金)18時30分から日本大学三島学園8号館2階において開催する。

昭和61年度 収支予算書

(昭和61年4月1日～昭和62年3月31日)

(単位：円)

支出の部				収入の部			
項目	本年度予算額	前年度予算額	増減(△)	項目	本年度予算額	前年度予算額	増減(△)
奨学費	550,000	550,000	0	会費収入	2,162,000	1,854,000	308,000
学園歌集発行費	200,000	200,000	0	雑収入	1,010,818	959,091	51,727
同窓会報発行費	300,000	300,000	0	前受金収入	900,000	900,000	
各科同窓会等補助	430,000	350,000	80,000				
総会並びに懇親会費	500,000	450,000	50,000				
会議会合費	300,000	270,000	30,000				
通信運搬費	100,000	100,000	0				
事務費	530,000	30,000	500,000				
雑費	500,000	400,000	100,000				
40周年記念事業費	2,000,000	0	2,000,000				
予備費	200,000	200,000	0				
計	5,610,000	2,850,000	2,760,000	計	4,072,818	3,713,091	359,727
基金繰入額	0	0	0	基金繰出額	2,400,000	0	2,400,000
次年度繰越金	900,000	900,000	0	前年度繰越金	37,182	36,909	273
前受金	900,000	900,000	0				
繰越金	0	0	0				
合計	6,510,000	3,750,000	2,760,000	合計	6,510,000	3,750,000	2,760,000

ラグビー部今・昔

大井徹也

昭和二十六年四月、日本大学三島教養部に入学した私は、世間知らずの未熟で多感な悪たれ小僧でした。教養部時代の一年間を当地、三島で過ごす様に配分され、人口二万人の地方都市三島市、学校と云えば建物は野戦重砲連隊の跡の兵舎があてられ、いかに戦後と雖も…。唯印象に残つて居る事は、秀峰富士の景観と学校前の銀杏並木のジャリ道くらいでした。下宿生活は、確か二食で三千円で一ヶ月分を支払つた様に記憶して居り、副食の貧弱さに泣き、入学以来二ヶ月位は新しい学生生活への夢破れた思いでした。その自分の気持のやり場に困つた結果、高校時代に経験したラグビー部へ入部したものでした。

当時のラグビー部は、総勢二十人たらず丁度二年生の先輩の少ない年に当たり、入部早々にレギュラー入りし静岡県下全体で十チーム位しかなく、大学は清水市の商船大学（現在の東海大学海洋学部の前身）と二校だけで、対戦する内では鼻つまみ者扱いでした。

海軍仕込みの荒くれラグビー、年齢・体格・経験と何一つ勝つていらぬものはなかつた。他は企業チーム、クラブチームに挑戦する以外になく、それでも年間に八~十戦位は試合した思い出があります。チームの内情と云えば、少ない予算額でプレメコース二年、文科系二年、工科系一年と云う各進路の異なる学生の中から二十人位で編成され、昭和二十二年三島開校時以来の先輩猛者の部活を絶えさせない程度の細々としたもので、大副食などの行事の時に本部から来校されるOB達には、大変な叱咤を受けたものでした。それでも十人位は常時学生服の下にはジャージを着込み、講義はサボリ、学生食堂のパンと牛乳やうどんなどを買ひ占めて一般学生を困らせ、時々学生指導部の玉津先生から怒られたり、軽部先生の考古学研究室の窓ガラスを故意に（飲食代を賭けて）破り、再三に亘り注意され、担任の小見山先生（英語）から退学処分にするところれたり、学内では鼻つまみ者扱いでした。

併し今、思い起こせば二、三期前の先輩方の様に、校舎の板壁をはがして火に燃やしたり、農家の畠の芋を掘つたり、稲穂を盗んで、年頃は世の中の食糧事情も徐々に回復して来てたようと思われます。それでも未だスポーツに関しても未だスポーツに関しても、古橋先輩の水泳日本の記録ラッシュのすぐ後のこととて、恵まれない時代のネクラな運動部活動でした。

それから過ぎること二十数年、三島学園も四年制国際関係学部、短大、文科系一年、高校と併設され、現況のよう三島学園となりました。昭和五十四年国際関係一期生の入学した時点で、ラグビー部再興の氣運があるらしいとの情報があり、一年後体育課からいろいろと打診を受け、高校生時代に経験した少数の学生と連絡をとり、クラブ活動をやるに足りる人数の確保が果たして出来るか？不安の中で一年間の準備期間を経て、五十六年度から体育団体の規約に準ずる同好会として発足し、三年後の五十九年度から正式に体育団体所属のラグビー部が誕生したものでした。

長の吉田先生の強力な支援のもとに、初年度二十数名の学生を集め、私は東京生活をしながら二足のワラジを履くこととなりました。また同好会から三年間を経て正式な部に昇格した時点で、国際関係学部の青木久尚先生に顧問としての重責を御願いし、現在に至つて居ります。

部員数も本年は四十数名となり、一応はラグビー部としての活動は活発に行われて居りますが、現今の中の学生気質か、社会現象の中の新人類と呼ばれる風潮のせいか、軟弱で大人しく要領の良い学生ばかりで、身体でスポーツをやる、覚える、ことが少ないよう思われます。我々の時代のラグビーと比較すれば、近代ラグビーは、スピードを重要視し、怪我やアクシデントを少なくするように、ルールも毎年少しづつ改正されて居ります。学生の体格的には平均的に身長は高くなつてはいるが、骨格、筋肉、靭帯（ジンタイン）は非常に痛めやすく、常時数名の者が練習を休んでいます。ならば、もう少し強くポーツ等の理由で学内的一部分に反対の声もあつた由、併し、御園の第二グラウンド使用を原則として、當時の小池事務局長先生、体育課長の吉田先生の強力な支援のもとに、初年度二十数名の学生を集め、私は東京生活をしながら二足のワラジを履くこととなりました。

対戦成績としては静岡県東部地区の社会人リーグの中では、十チームの中で常に三・四位に位置し、勝率六割は確保して居りますが、県全体の二十八チームのトーナメント方式による対戦では、昨年度は準々決勝で敗れ（八位）、本年は一回戦（九月七日）県下の強豪の静岡大学に遅れをとりました。大学生のチームとしては、県下で四チームしか存在しないため、対戦相手に恵まれず、企業チーム、自衛隊チームと対戦して戦績をあげる以外なく、例年大学祭当日は、校内キャンパスにて招待試合を行つて居ります。

同窓諸氏も、ピンクの生地に一本の白線のジャージーが躍る姿を見て、応援して下さるようお願いします。

学生時代を振りかえつて

長澤裕子

足速に通りすぎて、いつた短大生活の二年間は、言葉では言い表わせないほど多くの物を私に残してくれました。卒業してからも一ヶ月に一度は会っている親友、学生生活の大半を占めていたスキー部、自由、数々の失敗、そして苦しみなど。今考えれば毎日の出来事の一つ一つが貴重な体験だったと思う。その多くの体験の中でも、今でも私の心に深く残っている出来事があります。



(昭59・60年度商経科在学、)日本大学三島庶務課

大学二年の夏、私は好奇心から経済学部の簿記論を聽講しました。内容はともかく、他学部の講義を覗いて見ることはスリルがあり、とても楽しいものでした。そしてたつぶりとスリルを味わった私は、学生ホールへと、のどを潤しに降りていきました。新しくてキレイなホールは、生き生きとした学生で溢れ、ごったがえしていました。

初めて会う人たち、明るい、楽しそうな顔、顔、顔……。その中を作業服を着た一人の老人がキヤスターを押しながらゴミを集めてしまっていたのです。ところが学生たちはまるで、老人の姿が目に入らないかのように、誰一人として自分でゴミを捨てようとも、手を貸そうともしないのです。

この冷たい、無責任な光景は、とてもショックでした。無意識のうちに涙がこぼれています。悲しくてどうしようもなかったのです。たとえそれが老人の仕事であらうとも、自分で出したゴミくらには自分で片付けたいものです。これとは違うが、私だって、気づかないで、非常識なことをしているかもしれません。

人間として、数ヵ月後には一社会人となる者として、社会生活の最低のルールは守りたいし、人を思いやることができる余裕を、いつも心に持つていていたと切に思いました。

恒例の第36回三島大学祭は、昭和二十一年に予科発足以来の、学園開設四十周年を記念しての大学祭となつた。

学園としては、記念式典が十一月一日に開催され、本会からは、会長・副会長・学外常任幹事が招待されている。

大学祭の内容に触れてみると、実行委員長は、国際関係学部三年寺澤卓君で、普段の役は、学友会委員長・運動部出身の張り切りボイで、統一テーマは、足もとを見つめ直そう、という意味をこめて、「原点」、総勢一〇〇名の実行委員で頑張った成果である。

昭和六十一年十月、私は見習職員から正式に書記補に任命されました。これを機に、新たな気持ちで仕事に向かおうと思うのです。

第36回 大学祭開かる

演題「アメリカでの学生時代の生活について」

親善試合 九・〇〇
アメリカン・フットボール 対東海大学海洋学部

◇十一月三日(月)
ステージイベント一一・〇〇
一三四七教室

野外ステージ
一三・〇〇
農学博士 藤村俊彦氏
演題「国際技術協力を通じてみた開発途上国の農業と社会」

学術講演 一三・〇〇
一三四七教室



恒例の第36回三島大学祭は、昭和二十一年に予科発足以来の、学園開設四十周年を記念しての大学祭となつた。

学園としては、記念式典が十一月一日に開催され、本会からは、会長・副会長・学外常任幹事が招待されている。

演武会 一三・〇〇
大講堂

親善試合 一三・〇〇
野球 対東海大学海洋学部

演武会 一三・〇〇
大講堂

親善試合 一三・〇〇
野外ステージ

ステージイベント一一・〇〇
記念コンサート 一五・〇〇
一後援 日本大学三島同窓会

ステージイベント一一・〇〇
野外ステージ
大講堂

八神純子 大講堂

大講堂前

九・三〇
大講堂

九・三〇
大講堂

九・三〇
大講堂

九・三〇
大講堂

九・三〇
大講堂



親善試合

ラグビー

九・〇〇
東芝機械

閉会式 一五・〇〇
東芝機械

後夜祭 一六・〇〇
野外ステージ

一ファイア・ストーム
グラウンド

以上

同窓会の発展を期待して

中 茜 幸 治

(商経科同窓会長)

日本大学三島学園が昭和二十一
年六月開設以来、文理学部・短期
大学部・国際関係学部を設立し、
教育の場としての機能を充分に發
揮され、三島の日本大学として市
民に愛され、地域の住民生活と密
着し共に歩んで四十周年を迎えた
ことは誠に喜こばしいことで
あります。

短期大学部商経科二部同窓生も
昭和二十五年創設以来、三十五期
を数え一、八二〇名が巣立ち、学
園社会の実践活動から得た貴重な
体験を活かし、豊かな知性と道義
を兼ね備えた、有能な社会人とし
て各分野で活躍していることは同
慶の至りであります。

私達が学んだ昭和三十二年当時
は、なべ底景気と呼ばれる不況期
であり、就職難の暗い時代でした。
先の見通しも皆目つかぬまま、唯
知識を吸収し、広い視野に立つべ
く勉学に情熱を打ちこんだ日々。
青春時代の想い出として眼に浮か
ぶのは、毎日通った銀杏並木と木
造ぼろ校舎、そして手作りの学生
会誌と仲間の顔。お世話になった
今は亡き安藤、玉津、軽部、服部
先生のことである。私達のクラス
は過去最小の二十名編成でした。

私達の卒業直後に、生徒数の減
少で商経科二部閉鎖も考えられた
が、学校当局の御努力により継続

されることになり、昭和三十八年
には一〇〇名の学生数に増加した
が、最近は社会の変化と共に学生
気質も変りつつあり、生徒数も三
十名前後に推移していると聞いて
おります。

三島学園が三十周年を迎えたの
を契機に、我が商経科同窓会も定
期総会を開催し、幹事を中心に
事業である名簿の発行準備に取り
組み、十年間ある程度まとまりな
がら、同窓生の住所移転や転職等
の追跡調査をしてきたが、現在未
発行の現状です。今般、遠藤治夫
前会長の後任として会長をお引き
受けすることに当たり、この同窓
会名簿だけは不備不充分であつて
も、早急に発行をしたいと決意を
新たにしております。名簿刊行に
より住所や職業が窓口となつて、
同窓会員同志の親密さと連帯の糸
が強まり、人ととの触れ合いが
拡大されるでしょう。

幹事会の構成メンバーも若返り
活力も充分ですので、同窓生諸氏
の連携と御協力を戴き、同窓会を
より豊かな人間の触れ合う場とす
ると共に、強固な組織に創り上
げ、母校の発展に貢献したいと思
います。

桜文会だより

桜栄会だより

学内短信

春まだ浅い二月一日、卒業を目
前にした二年生を迎えて、第十七
回短大文科同窓会「桜文会」が三
島プラザホテルにおいて開催され
ました。

島プラザホテルにおいて開催され
ました。



春の息吹きを感じる三月
二日(日)、三島学園家政科同窓会「桜
栄会」の第二十六回総会が、田代
パレスにて開催されました。

出席者は、奥田三島市長、西村
同窓会会長はじめ恩師の先生方、
同窓生、在校生を含め一五八名で
しました。

まず平井会長の挨拶で始まり、
年間行事報告、会計報告など進め
られ、そして六期・十六期の方々
の進行により、親睦会では、近況
報告・歌などが盛り込まれ、和や
かかつ盛大な会となりました。最
後に来年の再会を約束して会を閉
じました。

桜栄会は新入会員二六五名を迎
え、益々大きくなっています。
桜栄会名簿は、現在各期幹事の
方と事務局とが中心となって作成
していますので会員皆様の御協力
をよろしくお願い致します。



事務局次長に 新保節保氏就任

七月一日発令の人事異動により
前農獸医学部藤沢校舎事務長の新
保節保先生が、三島学園事務局次
長にご就任された。

先生は、法学部事務局三十有余
年、農獸医学部事務局数年ご経験
のベテランで、三島でのご活躍を
期待申し上げたい。

事務長に 岸 利治氏就任

瀬川前三島学園事務長の後任と
して、前歯学部学生課長の岸利治
先生が事務長に就任された。
先生は、通信教育部・歯学部事
務局を経ての今回のご昇任で、都
会的なセンスを背景にしての成果
を期待申し上げたい。

瀬川事務長 経済学部へ栄転

三島学園事務長であり、前本会
事務局長であられた瀬川一男先生
は、七月一日付をもつて日本大学經
濟学部事務局次長にご就任された。

先生には、昭和二十八年四月か
ら三十三年三ヶ月の長い間、三島
学園の発展にご尽力されました。

また、同窓会事務局長としても
長きにわたり、お骨おり下さいま
した。先生の経済学部での今後の
ご活躍を期待いたします。